

ノイガンドレス再起動 ——「コンクリートポエトリー」を拡張する芸術実践

松井茂（情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]）

発表要旨：

本発表は、20 世紀後半に隆盛した、国際的な芸術運動としての「コンクリートポエトリー」の意義を批判的に継承し、21 世紀のメディア技術によって、ノイガンドレスの主題を再起動することを試みる、芸術実践研究である。

「コンクリートポエトリー」は世界的同時性をもった芸術運動で、ブラジルのアーティスト・コレクティヴ、ノイガンドレスによるマニフェスト「Pilot Plan for Concrete Poetry」（1958）が国際的に貢献した。その要旨は、「verbivocovisual」という造語の実現の呼びかけにあった。日本では「verbi=ことば voco=音声 visual=映像」（新国誠一）や、「言葉、音、視覚」（北園克衛）と紹介された。3 語の結合の背景には、ヴァネヴァー・ブッシュの「memex」（「As We May Think」1945）があった。つまり音声（音楽）と視覚（美術）の芸術を、計算機科学で領域横断することで、西洋語に存在しない表意文字の発明を目論む。表意文字のアイデアの背景には、エズラ・パウンドが取り組んだフェノロサの紹介（漢詩、能、書の翻訳）があった。「コンクリートポエトリー」の取り組みは、「Klankteksten - Konkrete Poëzie - Visuele Teksten」展（ステデリック美術館、1970 年）で頂点を築き退潮した。

冒頭で述べた主題に関する本発表は、発表者の作品である「音声詩 時の声」（『朝日新聞』2009 年 9 月 12 日）を、現代美術史の文脈でノイガンドレスの思想、

「verbivocovisual」の再起動と位置付け、芸術のダイバーシティが語られる現在において、西洋語の脱植民地化をはかる芸術実践として解釈する。発表は、ノイガンドレスの思想を再解釈した「新国誠一の《具体詩》 詩と美術のあいだに」（国立国際美術館、2008）の調査研究を前史として、コレクティブ的過程を含む「音声詩 時の声」が制作背景を述べ、それ以後、電子ギター版（松平頼暁、2013 年）、ライブエレクトロニクス版（青森県立美術館、2014 年）、楽譜版（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、2015 年）、ドイツ語版（多和田葉子、2023 年）、藤幡正樹の《Beyond Pages》との展示（恵比寿映像祭、2025 年）などを事例に、メディア技術による領域横断の相を論じ、「コンクリートポエトリー」の、特に「表意文字」の拡張を仮説し、「verbivocovisual」の現在的意義を主張する。